

2025 年 6 月 29 日（日）主日朝礼拝説教

『下る道へ行け』井上隆晶牧師

使徒言行録 8：1～5、26～31、ルカによる福音書 9：23～26

①【散ることによって】

キリスト教の最初の殉教者はステファノです。彼の殉教をきっかけとしてエルサレム教会に対する大迫害が起こり、使徒たち以外はことごとくユダヤとサマリアに散っていきました。ユダヤというのはエルサレムから西側にある海までの地域です。その端にはガザがあります。どうして使徒たちはエルサレムに残ったのでしょうか。生まれたばかりのエルサレム教会を守るためだったのかもしれませんが。しかし使徒言行録 6 章～8 章を見ると、使徒たちよりも散っていった人たちのほうが、めざましい働きをしているのがわかります。こう書かれています。「さて、散って行った人々は、福音を告げ知らせながら巡り歩いた。フィリポはサマリアの町に下って、人々にキリストを宣べ伝えた。」（使徒 8：4～5）12 使徒たちは人数が増えて来たキリスト教会を運営することや、教会を守ることで必死だったのではないのでしょうか。でもそこでは神の業はあまり現れず、むしろ散っていた信者たちの方が、使徒たちよりもっと神のために働くことができたようなのです。

この「散る」ということを私たちはとても嫌います。散ることは弱くなることだからです。聖書の中に最初に「散る」という言葉が出てくるのはバベルの塔の物語です。天まで届く塔を建てた人々は「**全地に散らされることのないようにしよう**」（創世記 11：4）と言いましたが、主なる神は彼らをそこから全地に散らされました。（創世記 11：7）歴史の中で神は、イスラエルの民を何度も散らしました。エジプトやバビロンの奴隷であった彼らは、そこから解放されて祖国に戻ってきて国を再建するのですが、再びローマによって国を滅ぼされ、全世界に散ってゆきます。世界中に散った彼らは、自分たちユダヤ民族のアイデンティティーを失わないために、先祖たちの物語を書き、神の預言を集めて編集し、旧約聖書を作ったのです。そうやってユダヤ教はできたのです。教会も同じです。迫害されて世界に散らされることによって教会は成長したのです。

②【得ることよりも失うことを】

●第二次世界大戦中の日本の教会の指導者たちは、キリスト教信者を迫害から守らなければならないと考えて、軍隊に協力をしました。当時の日本基督教団議長は伊勢神宮に参拝をし、ゼロ戦闘機を作るために教会は募金をしました。これに対して、辻宣道という人の父は日本基督教団の牧師でしたが、天皇の写真に頭を下げなかったという事で警察に捕らえられました。それ以後、信者は教会に来なくなり、信者からは迷惑顔をされ、冷たいまなざしを受けました。その中で家族だけで礼拝を守ったそうです。そのうち、彼の父は病気になりましたが、差し入

れもできませんでした。信者たちもかわいそうに思うけれども、近づいたら逮捕されるので何もできませんでした。ついに父の死の通知が刑務所から来ました。母といっしょにリヤカーで遺体を引き取りに行くと、遺体は冷たいコンクリートの上に置かれていました。火葬場には誰も来てくれませんでした。母と小さな子どもだけで葬ったのです。その小さな子どもだった辻宣道くんが後に牧師になり、日本基督教団の議長になってゆきます。一方、当時、信者に対して非常に配慮した教派は、日本の神と聖書の神は同じだというようなわけのわからないことを言って妥協しました。だから迫害はありませんでしたが、本当の信仰は死んだのです。

また、榎本保郎牧師の本の中にこんな話が載っていました。

●一人の宣教師がイヌイト（エスキモー）に伝道しました。その年は飢饉になりました。イヌイトたちはキリスト教の宣教師が自分たちの神とは異なる神を持ち込んだので、現地の神が怒って飢饉を起こしたのだと考えました。そこで宣教師のところへ行き、「お前の神に祈ってクジラを自分たちに与えてみよ。もし、クジラを与えられなかったら神の怒りを鎮めるためにお前を崖から落として殺す」と言いました。宣教師は昼も夜も熱心に祈りましたが、クジラは一匹も捕れません。イヌイトたちは怒って宣教師を崖から落として殺しました。次の日、宣教師の死骸を捜しに浜辺に降りてみると、その死骸の横に一匹の大きなクジラが横たわっていました。彼らはそれを見て悔い改め、キリスト教信者になったそうです。

キリスト教信仰というのはそんなに簡単に人に伝わるものではありません。説明したら分かってもらえるようなものでもありません。信仰というのは体を張って、自分の命を懸けて伝えなければ伝わらないものです。殉教は悲しく、怖いことですが、不思議なように信仰の子を産んでゆくのです。ステファノの殉教を見たパウロはやがて大伝道者になります。そのパウロが今度はリストラで同じように迫害され、石を投げられて大怪我をしますが、それを見ていたテモテがまたクリスチャンになり献身してゆきます。こうして血が流されて、教会は動かないものになっていきました。私たちは受けることよりも、与えることを考えなければなりません。与えても痛くもかゆくもない程度に与えるのは与えたことにはならないのです。与えることが、自分が痛いと感じなければ与えることにはならないのではないのです。受けることよりも捨てることを本気で考えなければなりません。それが十字架を負って後に従うということなのです。

③【神の国を伝えることは教会にしかできないこと】

さて、フィリポの伝道について少し見てみましょう。「ここを立って南に向かいエルサレムからガザへ下る道へ行け。そこは寂しい道である。」（使徒 8：26）とあ

ります。サマリアからエルサレムに帰ってきたフィリポを待っているかのように、天使はガザへ下る道へ行けと命じました。そこは昔から荒れ果てた人のいない寂しい道でした。こんな人のいないようなところへ出かけて行って一体何をしようというのでしょうか。しかしフィリポはすぐに従いました。人間の判断では受け入れられないようなことでも、神の命令だと思って従うのが信者です。するとフィリポは、その道でエルサレムで礼拝を終えてエチオピアに帰ろうとしていた宦官に出会いました。フィリポは彼に福音を伝えると彼はそれを信じ、洗礼を受けてキリスト教徒になりました。この彼によってエチオピアはキリスト教の国になったといわれています。エチオピア正教会です。神様には計画があります。フィリポによってエチオピアを救ったように、私たちを通して何かをさせ、誰かを救おうとされているのです。

榎本先生の教会は毎年、地域の人を招いて市民クリスマス会を開き、クリスマスページェントと礼拝をしたそうです。そのために大変な準備と労力と費用がかかりました。ある年に「今年は市民クリスマスをやめて、その費用で餅を買い、高齢者施設に配ったらどうか」という意見が出ました。しかし榎本先生は「餅を配ることは教会でなくてもできる。しかしイエス・キリストを宣べ伝えることは教会しかできない。」と言って、クリスマス会を続けたそうです。キリストを伝えることは教会に託された聖なる務め、使命です。使命を失うとき、教会は命を失います。聖霊によって力を得、神の言葉に従って主イエス・キリストを伝える道を歩き続けましょう。